

実践

ノートルダム女学院中学高等学校 「問いのデザイン」研修会レポート

2015年8月、京都市にある私立・ノートルダム女学院中学高等学校は、教科学習でアクティブ・ラーニングを広めていくために、塩瀬准教授を講師に迎え、教職員研修会を開きました。当日の研修では、生徒の思考を促す発問とはどのようなものを学ぶとともに、同校教員から選ばれた4人のコアメンバーが、自身が行うアクティブ・ラーニングの事例を発表し、その実践を基に参加者がアイデアを深めていきました。その内容をレポートします。

0 事前準備

研修会の事前準備として、塩瀬准教授とコアメンバーの4人とで数回打ち合わせを行いました。アクティブ・ラーニングとは何かを考えていく上で、まず先生方がこれまで行ってきた授業の中で、手応えがあった授業がどのようなものだったかを話し合いました。その結果、そういった「よい授業」には「生徒自身が主体的に考え行動できること」や「試行錯誤ができる時間・環境を設けること」が大切だということが見えてきました。一方、生徒に対する問いの投げかけ方など、より質の高いアクティブ・ラーニングを実現するために検討すべき課題も挙げられました。そこで、研修会では、各自が授業での実践内容を発表・共有し、参加している全教職員と共に、よりよい「問い」をつくる方法を考えるグループワークを行うことになりました。

進め方のポイント

「アクティブ・ラーニング」といっても、ピンとこない先生もいます。そこで、まずは自身の授業や自分が体験した授業を中心に振り返ってもらい、生徒主体的の学びの要因を考えるきっかけとしました。

1 あいさつ・研修会の目的の共有

5分

栗本嘉子校長が研修会の趣旨を説明し、講師の塩瀬准教授を紹介しました。塩瀬准教授は、「アクティブ・ラーニングの研修会なので、ワークをしながら、自分の頭で考え、アクティブに学びましょう」と提案。「アクティブ・ラーニングは、生徒主体の学びです。その学び方については、教科の専門性を超えてアドバイスをし合えるものですから、遠慮せず話し合うことがポイントです。挑戦と失敗を繰り返すことで定着していきますから、その第一歩を今日行いましょう」と、研修会の目的を伝えました。



進め方のポイント

最初に研修会の目的を共有します。グループワークがメインとなるので、話し合いのルールもここできちんと伝えます。

事前に用意するもの…A 3判のスケッチブック、油性の太いマジックペン

※参加者数を1グループ3～4人として割り、グループ分のセット数を用意

2 講演「今、なぜアクティブ・ラーニングが求められているのか」 10分

ベネッセ教育総合研究所の佐藤昭宏研究員が、近年、アクティブ・ラーニングが重視されてきている背景を説明しました。これまでとこれからの教育改革の流れを踏まえた上で、学校としてどのような課題認識をもち、この変化に対応していくかについて「社会的要請」（グローバル化・少子高齢化等の社会環境の変化）と「生徒からの要請」（学習者が学んだ知識を自ら活用しながら習得していく機会や多様な学び方を求めるようになってきたという変化）という2つの観点で提示されました。

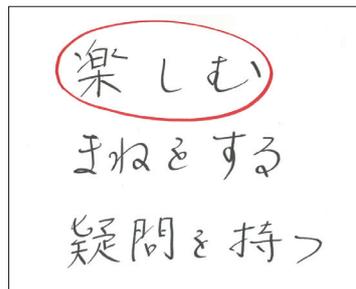
3 問いのデザインの考え方を学ぶ 60分

塩瀬准教授がファシリテーターとなり、ワークを行います。

①自分の理想の「まなぶ」を改めて考えましょう

「まなぶ」の反対語と類義語を考えるを通して、教員として生徒たちにどう学んでほしいのかを改めて考えます。

- 1 A 4判用紙を横にして、真ん中に「まなぶ」と書いてください。
- 2 左側に「まなぶ」の反対語を3つ書いてください。
- 3 右側に「まなぶ」の類義語を3つ書いてください。
- 4 席が前後2列で4人1組になり、「まなぶ」の反対語と類義語を共有しましょう。
- 5 グループで、理想的な「まなぶ」の類義語の一つあげて、スケッチブックに書いてみましょう。
- 6 理想の類義語を近くのグループで共有し、説明し合ってみましょう。



②議論のしやすい問いの出し方を考えてみましょう

教員はいつも授業で発問をしています。それをさらに論理的に捉え直し、深めていきます。

- 1 佐藤研究員の講演「今、なぜアクティブ・ラーニングが求められているのか」の内容を基に、問いかけ方を例示していきます。
- 2 なぜ、アクティブ・ラーニングに対応する必要があるのでしょうか。その理由は、「社会からの要請だから?」、あるいは「生徒の要請だから?」。先ほどのグループで話し合ってみてください。どちらか一つを選んで、その理由も述べてください。
- 3 21世紀型能力には、基礎力、思考力、実践力の三層構造で、10の要素がありました。今の授業で育成できていない、授業で育成しようと考えたこともないという能力を、スケッチブックに書き出してください。
- 4 スケッチブックに書き出した能力の中で、今後5年間で子どもたちに育てていきたいと思う能力の一つだけ挙げてください。
- 5 皆さんが挙げた能力をグループで共有しましょう。
もう一つ、議論を活性化させる方法として、情報の偏りを活用した例を紹介しました（内容は4ページ図3参照）

進め方のポイント

「まなぶ」は、誰にとっても生きるために重要であり、普遍的なことです。ぜひ一度、子どもたちにも問いかけてみてください。

「まなぶ」の反対語に挙げた言葉

- 1位 なまける
- 2位 さぼる
- 3位 あそぶ

「まなぶ」の類義語に挙げた言葉

- 1位 かんがえる
- 2位 しる
- 3位 成長する

どちらもいろいろな言葉が挙がっていましたが、類義語のほうがより多くの種類の言葉が挙がっていました。

進め方のポイント

「あえて一つを選ぶ」ことが、この問いの重要な点です。「一つ」と言われることで、どちらかを選ぶために深く考えます。また、このワークの目的は、どのような問いかけ方が考えやすいかどうかを体験を通して考えてもらうことです。時間がなければ全体発表はせず、次のワークに進みましょう。

③問いの文章の作り方を学びましょう

問いは構造化してつくることで、より考えやすくなります。それを実際に体験します。



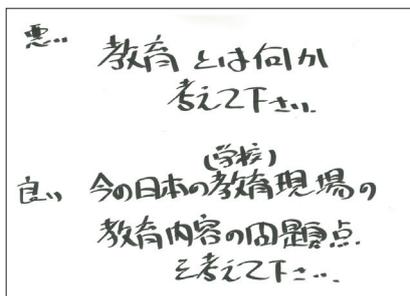
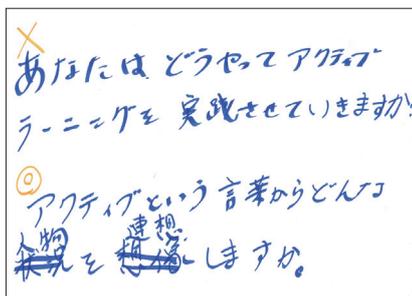
- 1 これから質問を出します。グループでファシリテーターを1人決め、その人が他のメンバーに問いかけ、メンバーはそれに答えてください。質問ごとにファシリテーターは、時計回りに交代してください。
- 2 一つめの質問は、「あなたは、今日、朝ご飯に何を食べてきましたか？」
- 3 二つめの質問は、「朝ご飯で必ずこだわっていることは何かありますか？」
- 4 三つめの質問は「今月食べた朝ご飯の中で、最も美味しかった朝ご飯は何ですか？」
- 4 四つめの質問は「あなたが考える豊かな朝ご飯とはどのようなものですか？」

このように、誰に何を問うのかを考え、問いを構成する制約や構造を検討することで、より答えやすい、より考えを深めやすい問いをつくることができます（3ページ図2参照）。

④【実践】「生徒が考え出す問い」と「生徒が黙り込む問い」をつくってきましょう

これまでのワークで行ってきた内容を生かして、「よい問い」をつくります。問いかける例だけでなく、問いかけられる側にとっても「よい問い」なのかを確かめるために、他のグループと質問し合います。よい問いは、問いのプロトタイピング（試作）をたくさんする中から見つかります。小さな問いを何度もつくりなおしていくと、その中からよい問いができてきます。たくさんチャレンジするために、このワークを取り入れています。

- 1 これからわるい問いの例をお見せします。それを基にして、学校の先生を対象にアクティブ・ラーニングの研修をする講師になったつもりで、「よい問い」と「わるい問い」を考えてください。まずは個人でつくってきましょう。
- 2 グループで見せ合い、「よい問い」「わるい問い」「その中間の問い」の三つに絞り込んでください。
- 3 グループで決めた「よい問い」と「わるい問い」を隣のグループと質問し合いましょ。その際、相手の反応をよく観察してください。それによって、本当に「よい問い」か「わるい問い」かが分かります。



進め方のポイント

今回は午前中の研修会だったので「朝ご飯」としました。開催時期、参加者の属性などによって、誰もが話しやすいテーマにするとよいでしょう。

参加者の気付き

「生徒が考え出す問いとは？」

- 生徒の生育歴、経験を考慮し、興味を引きそうなポイントを絞り、小さな点から大きな点へと問いを引き出していく。
- より具体的で、いくつもの問いかけを踏んで、最終的にそのテーマの本質に迫るような問い。
- 問われる対象がそのことをどの程度知っているか、どの程度興味をもっているかを質問者が知っている必要がある。相手の答え方を見て、問いを変化させる柔軟性も大切だと思った。

参加者の気付き

「生徒が黙り込む問いとは？」

- 知識を問うような問い
- 抽象的な質問
- 言葉の定義が必要とされるような単語を使った質問
- 自分とのつながりが感じられない問い

進め方のポイント

前段でお話した、問いの制約条件のつけ方について振り返りながら、わるい例を例示します。

4 身近なアクティブ・ラーニングの種を育てる 60分

「生徒主体の学び」は、教科を超えてアドバイスし合えるものです。コアメンバーの実践例を紹介し、それぞれの例について、問いや課題設定をどのように工夫するとさらに生徒の考えが深まるのかをディスカッションします。

1 コアメンバーの先生4人が、自分の行っているアクティブ・ラーニングの事例を報告します。

◎テーマ1 板谷悠子先生「平安貴族の貝合わせと襲色目」

小学生対象のオープンスクールで使用する「貝合わせ」の制作を生徒に依頼。現代の遊びとのつながりや当時のハマグリの入手方法などを考えることで、古典の世界と現代の距離を縮める体験をしました。

◎テーマ2 鳥山拓先生「キリンの背丈を測る」

数学と日常をつなぐ活動として、動物園を訪れ、生徒が制作した簡易計測器でキリンの背丈を計測。誤差を修正するために試行錯誤をしながら、正確に計測する方法を考えてもらいました。

◎テーマ3 中村良平先生「教え合いと2回戦」

英語の夏季講習での実践です。入試問題のプリントを各自で解き、その後ペアワークで内容理解を深めました。分からない問題はペアの相手と教え合って解決。最後にもう一度、類似問題のプリントに取り組みました(2回戦)。教員が教えるのではなく、生徒同士で問題を解決して知識の定着を図るとともに、「2回戦」というゴールを設けて意欲を高めました。

◎テーマ4 黒岩かおる先生「1000時間の元を取る」

3年生の3学期の授業で、今まで数学を学習してきた学んだことをエッセーにまとめて、それを新聞の投書欄に投稿しました。文系の生徒の多くは、大学に進学すれば数学の学習とは離れてしまいます。中高で1000時間、数学を学んできた意義を改めて感じてもらう場としました。

2 参加者全体を12のグループに分け、1テーマを3グループずつで分担し、テーマの保有者を応援するアイデアを出しましょう。この間、コアメンバーは、自分の実践を応援してくれるグループを回ります。

3 どのように自分の担当教科に応用できそうかアイデアを出しましょう。



進め方のポイント

ここで重要なのは、問いのプロトタイプング(試作)をする事例が、同じ学校の先生が行っている実践であることです。相手にしている生徒は同じですから、指導を具体的にイメージしやすいでしょう。

参加者の気付き

「研修を振り返って」

- 授業では意識して生徒に問いかけていますが、そうすることで知識が頭に入りやすいと思っていたからです。塩瀬先生のお話を聞き、知識よりも考えるプロセス、そして、その先が大切だと改めて気づかされました。(保健体育)
- 今まで「やりたい」と考えていたことが、教科会で話題になったことはたくさんありましたが、なかなか行動に移せませんでした。一人ではなく周りの先生方を巻き込んで、共にアクティブ・ラーニングを実践していきたいと思いました。(国語)

5 まとめと振り返り 20分

今日の研修を生かして、明日からどのような取り組みをしたいと思いましたか。また、分かったこと、学んだことは何でしょうか。配布した用紙に記入をお願いします。



研修を終えて

「生徒主体の学びの実践」を学校に定着させるためには、教科を超えて課題やアイデアを共有できること、挑戦と失敗を許し合えること、そして、そのようなことを遠慮せずに話し合える環境をつくるのが大切です。そのきっかけが、今日の研修であることを願っています。